古北欧の「中つ国」と「根の国」

水 野 知 昭

スカンジナビアのみならず、東はロシア、エストニア、西はブリテン島、ブルターニュ、アイスランドにいたるまで、鉄器時代と中世の地層から500以上の船葬墓が発見されている[1]。英国では1939年にサフォーク州のデーベン河畔にて発見された、サットン・フーの船葬墓が最も有名である。墳丘から長さ27メートルの船の骨格が出土した。剣、巧妙な装飾をほどこした鉄の兜、黄金の留め金、それにメロヴィング朝の硬貨を入れた財布、銀食器やスプーン、酒盃などがともに発見されている。625年前後に逝去したイースト・アングリアの王の葬地であろうと推測されているが、甲板に設置された木製の棺の中にも、その船の周辺においてもなぜか遺骸が発見されていない。数々の出土品から、当時のスウェーデンのヴェンデル文化との関連が密接であり[2]、すでに7世紀以前にスカンジナビアからイングランドへ人々が移住していた証跡とみなす学者もいる[3]。あるいはまた「死後、霊魂が海のかなたの霊地に向けて旅立つ」古代信仰を反映しているとも説かれてきた[4]。「その船首が東側の内陸部を向き、船尾は西を流れる川の方に向けられていた」という報告から推せば[5]、死者の船はこの場合、東の北海のかなたをめざしてゆくことが祈念されたのだろうか。しかしそれならば、『ベーオウルフ』をはじめとして幾つかの文献上の証拠もあるように、王の亡骸を直接船に載せ、潮流にゆだねる葬送があったにもかかわらず、なぜ、あえて大地の中に船を埋葬したのだろうか？

北欧の類例としては、ノルウェーのオスロ・フィヨルドの西岸より出土した、葬送年代815-20年頃のオセベリ船（1904年出土）、880-90年頃のゴクスタ船（1880年出土）などがよく知られている。前者の船には王妃と侍女ともくされる人物、後者には50歳位の男性が葬られていた[6]。この場合も、「なぜ、地面の中に船が？」という、同じ問いが投げかけられるにちがいない。もしかすると、大地と海をつなぐ壮大な世界観が存在していたのではないかという素朴な疑問を抱き、考察を始めることにした。

I

北欧神話において「神々の没落」（ラグナレク）を語る断章に、ナグルファルという名前の船が登場している。奇妙にもその船は「死者の爪から作られている」と記され、舵を取るのはHrymrという巨人だが[7]、この名の語源については解釈が分かれている[8]。しかし仮にON hruma「虚弱になる；老衰する」意味に関連させると、神々の破滅を導く魔の軍勢の船の統帥フリュムは、いささか皮肉めいたことに「老いぼれ」を意味する。スノッリの記述では、ナグルファルの船が「解き放たれる」時と、「巨人の激怒」（jötunmóðr）に駆られたミズガルズ大蛇の襲来の時がほとんど同時であるかのような筆致になっている。これは基本的には次の「巫女の予言」の語りを踏襲したものであろう。

(1) フリュムは楯をかざして、　　東から馳せ参ずる。
巨人の激怒に駆られ、　　猛き大蛇は身をくねらせる。
大蛇は大波をかき立てる。　　そして鷲は甲高く鳴き、
赤錆(さび)たくちばしで死者を引き裂く。ナグルファルは縛めを解かれる。(「巫女の予言」50節)[9]

「猛き大蛇」と訳出した原語はJörmungandrで、第1要素Jörmunrは、東ゴートの勇猛なる王Jörmunrekr（375年頃没）の名にも見える。第一要素jörmun-（OE eormen-）は「大いなる」または「力猛き」を意味し、第二要素-rekr（OE -ric）はしばしば人名に使用される接尾辞だが、ゲルマン語の形容詞ríkja「力強い」（OE ríce、OS ríki その他）から「統率者」を意味する名詞（ON rekr; OE ríca など）が派生したという説がある[10]。「猛き大蛇」の第2要素gandrは「魔術師がその魔法をかける対象」が原義であり、また魔術に必須な「魔法の杖」を意味していたが、転じて「魔物；怪物」を意味するにいたったとされる[11]。

さて、上に引用したJörmungandrは「力猛き魔物」すなわち世界を取り巻くミズガルズ大蛇を指していることは疑いえないが、その世界蛇をgandr「魔法の杖」と呼びなすことによって、「海の木」（ON sa-tré; OE sæ-wudu）なる「船」との間に密接な連想を生み出している。なお、鷲を形容するnið-fölr「赤錆びた；黄褐色の」を校訂してneffölr「くちばしの蒼白い」と訳す解釈もあるが[12]、ここでは採らない。

バルドルを葬送する船はHringhorniという名称だが、「輪形；円」を意味するhringrは「指輪；腕輪」、鎖かたびらの「輪形の鎖」をさす。ちなみにhring-leikrは「輪舞」を意味する。hringrの語が単独でも「船」を指すのは、湾曲した木型を組み合わせた船の工法に由来しているだろうか、それともOE hringed-stefnaおよびhring-nacaの詩語に見られるように、「輪形に湾曲した舳先」を持つ船の形から由来するのだろうか（Beowulf 32；1862；1897行）[13]。思うに、船首のくびれた形と、攻撃・威嚇の態勢に入ったときの、鎌首をもたげた蛇の形が相似しており、船と蛇の連想は比較的容易だったであろう。実際にヴァイキング船の舳先に「竜頭」の飾りを付けることはよく行われた。ノルウェーのオセベリ船のように、湾曲した舳先そのものに蛇の頭部をあしらった例もある[14]。古英語のhring-mælという詩語は逐語的には「輪形の装飾」だが、そのような「輪形」あるいは「蛇文」の飾りをほどこした「剣」を意味していた（Beowulf 1521；1564；2037）。またhring-bogaは直訳すれば「湾曲した弓」だが、ベーオウルフに対する攻撃の時をうかがう「とぐろを巻く竜」を意味した（2561）。この複合語の第2要素bogaは動詞bugan「曲がる；たわむ」の過去分詞（bogen）から派生しているが、竜が火を吐きながら「身をくねらせて進む」さまを表わすのにこの動詞が用いられている（2569）。したがってhring-seleが「宝環に満ちあふれた竜の館」（2840；3053）を意味するのも理解できる。この場合hringは両義的であり、「輪形の宝物」と「とぐろを巻く竜」の両方を意味している。

さて、バルドル葬送の場面において、このHringhorniなる「最大級」の船を海へ押し出そうとしたが、梃子(てこ)でも動かなかったという。そこで急遽召還された者が女巨人のヒュロッキンであり、彼女は「狼にまたがり、“毒蛇”の手綱をさばきつつ」訪れたと記されている。この出現の仕方はいかにも奇妙だが、ヒュロッキンが「船首から一押しすると」、バルドルの船は見事に進水したという。ここにも船と蛇のあいだに「輪形のもの」として強烈な連想が見える。

ヒュロッキンがバルドルの葬地に到着して、「またがっていた狼」から飛び降りたとき、狼は「例の馬」(hestinn) と呼ばれている。4人の狂暴戦士 (berserkir) の力をもって、かろうじて「例の馬」(=狼) を取り押さえることが出来たと記されている (Gylf 49)。この場面で、あえて「狼」を「例の馬」と呼びなしたのはもうひとつの要因があるだろう。別の稿で述べたように、ON segl-vigg「帆の馬」、vág-marr「波の馬」、および OE brim-hengest「海の馬」は、「船」を意味する伝統的なケニングであった。したがって、このような語り口によって、バルドルを海の彼方へ葬送する「船」とヒュロッキンの「馬」の間に宗教的な連合が創出されていると言えよう[15]。船のみならず、馬も、死霊神オージンの八本足の馬スレイプニルの神話に代表されるように、死者をあの世へと拉致する乗り物であった。

以上の論を踏まえ、改めて上記(1)の用例を見てみよう。フリュムが支え持つ lind はその名からして「菩提樹製の円形の桶」を思い描くべきだろう。たとえば hringr Ullar「ウッル (決闘の神) の船」という語句は実際には「円桶」を意味していた (「グリーンランドのアトリの歌」30節)[16]。巨人が舵取りを務める船ナグルファルと、「猛き魔法の杖」と呼びなされたミズガルズ蛇が「大波をかき立てつつ」海を渡り進む姿態は、明らかに連合されている。しかも、後にも述べるように、北欧神話に描き出された世界観によれば、人間の住む大地はミズガルズ「中つ国」と称され、その外側が「円形をなして」(kringlóttr) いたとされる (Gylf 8)。そしてミズガルズ蛇については、来たるべき「大災難と不幸」を予知した神々の計略とオージンの神力によって、「すべて地を取り囲む深い海」の中に投げ入れられ、大きく成長した後にも、「その海原の真っ只中」(í miðju hafinu) にて自分の尻尾を噛むように仕向けられたという (Gylf 34)。つまり、この世界は三重、四重に「円形をなすもの」によって成り立っているという考え方が打ち出されている。「自分の尻尾を噛む」大蛇が形作る円形は、解きがたい呪縛を意味するだろう。典型的には、mold-þinurr「大地の帯」という呼称がミズガルズ蛇のそうした本質を表徴している。ところが、何らかの原因で、上記(1)の最終行にあるように、死者の船ナグルファルの「縛めが解かれる」(losnar) 時機にまさに呼応して、ミズガルズ蛇はおのれに科された「円の呪縛」を振りほどき、神々を滅亡せしめるための大攻勢に転じた、と読める。

一体いつ、円の呪縛が解けたのか？　私は思う。それはオージンの愛息バルドルが殺された時だと。バルドル殺害神話については種々の見地から卑見を提示しているので、いまそれを繰り返すつもりはない。最近では、「あらゆる称賛を集中して浴びていた」バルドルが mann-hringr「円形を成して囲む神々の集団」の、まさに真ん中で殺されているという伝承事実に着目して論じた[17]。ロキはその「円形」の外側にいたホズルを唆し、かれを「下手人」(hand-bani) に仕立て上げてバルドル殺しを実現した。したがって「殺しの教唆者」(ráð-bani) と称されたロキがひいてはその「息子」とされるミズガルズ蛇を、円の呪縛から解放したと読みとくことができる。

II

複合語 Jörmun-gandr「猛き魔法の杖」の第1要素は、「牡牛」への変身者としての主神オージンの異名ともなりえた。北欧神話を見れば、オージンと馬、熊、鷲4あるいは狼との関連はきわめて密接だが、「牡牛」との関連はいささか奇妙だと考えたヤン・ド・フリースは、この

Jörmunrという異名は元来、より古き天空神ティウ（Tīwaz）崇拝に関わる用語であろうと推定した[18]。そうするとJörmunrの原義として「呪力の旺盛な」を想定できるだろうか？　この推察を検証することが必要となろう。北欧神話における「誓約と勝利祈願」の神テュール（Týr）はゲルマン共通の神ティウに遡及してゆくが、Jörmunrということばの考察はしたがってこの神の原姿に光を投ずることにもなる。ゲルマン諸語の同系語を通観してみても（ON jörmun-, OHG irmin-, OS irmin-, OE eormen-その他）、この語が形容詞として単独で現れるのは、古英詩におけるわずかに2例であり、そのいずれもeall「すべての；まったき」と結びつき、「大地」（grund）がどこまでも「広がりわたる」意味で用いられている。たとえば“ofer ealne yrmenne grund”「あまねく広大なる大地のすみずみに」（Juliana 10）の語句は、王の支配権がどこまでも遠くまで及んでいることを表わした（類例はChrist 481）[19]。他はeormen-grund「広大なる大地」、eormen-cyn「すべての人間」などの用例に見られるように、複合語の第1要素となっている。たとえば『ベーオウルフ』では次のような文脈で用いられている。

(2)　かくしてベーオウルフの
偉業は称えられた。　多くの者が度々語ったのだ、
南と北を問わず　ふたつの大海の間の
"広がりわたる大地"の此処かしこにて、　楯もつ武人の中でも
彼よりも優れ　王国にふさわしき者は、
この大空の下では　他にだれもいないのだと。　(Beowulf 856-61)

(3)　…私の聞くところでは　すべての人間の中で
ふたつの大海の間で、　“全地にわたり住む人の種族”の中で
かの主君こそ最も優れたる者という。　というのも、オッファは
贈与と戦功において、　また槍の王者として
広く称賛され、　賢慮をもって
おのが祖国を統治したゆえ。　(Beowulf 1955-60)

用例(2)は、デネ国（デンマーク、シェラン島）において怪物グレンデル退治を成し遂げたベーオウルフの名声が確立したことを歌い上げている。すなわち、eormen-grund「広がりわたる大地」の至るところにて、およそふたつの海（バルト海と北海をさす）に囲まれた四方の世界において、その偉業が称賛されたと。用例(3)も、アングル族（ブリテン島に移住する以前、ユトランド半島の南部に居住）のオッファが名君として高名を馳せたことを語っている。ここでも共通して、「ふたつの大海の間で」という表現との対句をなしながら、大地にあまねく王の統治権の拡充されたことを語る文脈において、複合語eormen-cyn「全地にわたり住む人間の種族」が用いられている。したがってeormen-は、「地平のかなたに広がりわたる大地」に表徴されるように、「全空間的な包括性」を基本義としていたと言えよう。だが次の引用にみられるように、eormen-lafは竜の棲み処に隠されてあった「莫大な古宝」（Beowulf　2234）を意味しており、eormen-はこの用例では明らかに「大量」であることを示している。このような量的概念は「空間的な包括性」の基本概念からの派生として単純に言い切ることはできるで

あろうか。この語が使用された文脈に照らして検証を試みたい。

(4) その地下の館には　　伝来の財宝の数々が
大量に置かれてあった。　　過ぎし日々に
武人の誰かが　　貴なる部族の
“大いなる遺産”を、　　愛すべき財宝を
感慨もひとしおに　　その地に隠したのだ。　(Beowulf 2232-36)

「大いなる遺産」と訳出した eormen-laf は、単に数量が「莫大」であることを言っているわけではあるまい。上記の(2)と(3)の用例と共通して、ここでも「大地」との関連が密接である。「地下の館」(eorð-hus) なる竜の棲み処は、「海の波が寄せる岬の近く」(2242-3) にあったと記されている。beorh「塚；墳丘」(2241) と呼ばれたその棲み処は、元来は王または勇者の葬地とほとんど同一視されている。先祖伝来の宝物を大地に隠し置いた者は匿名だが、それもそのはず、いまや竜がその宝の守護者の役柄を果たして以来、300 年の歳月が流れたという (2278-80)。「塚穴の守護者」(beorges hyrde ： 2304) と呼ばれた竜は、folces hyrde「民の守護者」と呼ばれた王と相関関係に置かれ擬人化されているものの、その一方では数々の財宝を生みだす根源としての「大地」そのものの化身であるかに見える。この推定を導きだし得るのは、「宝環の守護者」(hringa hyrde: 2245) なる王者クラスの匿名人物が財宝を beorh「塚穴；墳丘」に埋め隠すとき、大地に向かって次のような言句を発しているからである。

(5) 「さあ、大地よ、　　貴人の財宝を
いまこそ汝が握るのだ、　　勇者たちにはもはや叶わぬゆえに。
ああ、優れた武人たちが　　かつては汝から奪ったのだが、
争闘による滅びと　　恐るべき災禍が
わが民なる　　人々をみな連れ去った。
酒宴の喜びを味わい尽くし、かの者たちはこの世を去ったのだ。」(Beowulf 224-52)

金銀などの財宝、ならびに武具を作る鉄、銅、鈴などはすべて大地から生み出されるものであるのに、人間はその財を大地から収奪し、自分たちのために加工し種々の仕方で利用する。それらを身にまとい、また飾り立てていた者は次々にこの世を去った今、「大地よ、ふたたび汝が数々の財物 (ahte) を所有せよ」と叫んでいる。死者を葬る際に、生前に使用した武具や財宝を副葬品とする慣習は、あの世へ行く死者への奉納という考え方のみでは説明できない。それ以外に、物惜しみもなく財物を大地に埋める慣習が存続した背景には、このように、「財物そのものを産出した大地にふたたび還元させる」という思想、言い換えると「豊饒と富をもたらす」大地への崇拝がひそんでいるように思える。王や勇者の葬送に際して、財物を大地に返せば、また然るべき時に大地は別のかたちで産み出してくれるという信仰が存在していたのかもしれない。したがって eormen-laf「大いなる遺産」という複合語は、その財を産む力としての根源地 (grund) としての大地にまつわる古代信仰より発していると思う。OE eormen-, ON jörmun-という言葉は、空間的な「広大さ」と「包括性」のみならず、「超自然的な力」、

特に「母なる大地の産出力」、豊穣力・豊沃力を含意していたと仮定できる。上記の引用例(2)と(3)に見たように、eormen-のそれぞれの複合語が「王または勇者の名声の確立」の文脈で使用されていたことが改めて注目される。OE mærðu「名誉；栄光」、blæd「名声」、lof「称賛」などの語に内包された概念は、ステファン・バーニィなどの言を借りれば、「英雄の栄光と名声が数世紀にわたって人々の口から口へと語り継がれる、安定した口頭伝承の文化基盤を前提にしている」とされる[20]。すなわち eormen-の基本義の中に、空間的な「包括性」に加えて、時間的な「永続性」の概念を想定すべきことになるだろう。このように想定してはじめて、OE eormen-strynd「偉大なる世代」、および eormen-þeod「偉大なる民」といった複合語が成立する根本理由も納得できるだろう。これらの用語 eormen-は、「広大な地」に子々孫々に伝承・継続されることを含意し、いわば時間と空間の双方の領域における「普遍性」とも言うべき概念を内包している。

III

古英語 eormen-grund に対応する複合語がスウェーデンのカルレヴィ（Karlevi: Öland 島）のルーン碑文の中に認められる。その古スウェーデン語の綴り字 iarmun-krunt は古アイスランド語に直すと jörmun-grund である。その島の西海岸に葬られた首長、シッベ・フォルダルの息子を記念して 1000 年頃に建立されたらしい[21]。しばしば王や諸侯の前にて勇者の事績を称えて吟詠するときに愛用された韻律（dróttkvætt）を用い、いわば英雄詩の体裁を取っている。

(6) 戦いの女神スルーズの意思を遂行せし者として
——なんびとも知ることなれど——
最もあつき信望が寄せられた、
かの戦士がこの塚に隠され、葬られてある。
海の王者（エンディル）の大いなる地平を
旅ゆくヴィズル神（オージンの異名）が、
デンマークにおいてかくも勇猛果敢にして
土地を治めることはもはやあるまい。

英雄詩としての格調の高さはかえって詩の内容を分かりにくくしていることは否めないが、訳は S.ヤンソンのアイスランド語訳を参考にした[22]。スルーズ（Þrúð）の名について、ヤンソンは「軍神ソールの娘」と説いているが、オージンに奉仕する死界の乙女ヴァルキュリャのひとりにも同一名が見え（Grm. 36）、解釈の分かれるところである。いずれにしても「スルーズの意思の遂行者」という語句は、数々の戦いにおいて武勲を打ち立てたことを意味している。勇者が葬られたことを、ON fela の過去分詞 folginn「隠された」で表現することは常套であったようだ[23]。エンディル（Endill）の名は不明だが、ヤンソンに従ってこれを「海の王者」と解釈するならば、この名詞（属格）が掛かる問題の語句 jörmun-grund は、「広大なる大地」の意にとどまらず、「広がりわたる海または海底」の意味に解さざるをえない。上ではそのような広義の意をこめて、「大いなる地平」と訳出しておいた。

「旅ゆくヴィズル神」を reið-Viðurr の訳語として当てたが、ヴィズルは戦いの勝敗を司るオージンの別名である。通常、OE Weder-Geatas「嵐のイェーアト族（南西スウエーデン）」などの語と関連させ、嵐の神オージンの異名と説かれている[24]。しかし私は最近、自然界の嵐と、「荒ぶる」戦士の霊魂との間には古代信仰に基づく密接な連想があったことを踏まえ、北欧の神オージンは、「荒れ狂う」風を惹き起こし、戦士たちを「激情」へと駆り立てるのみならず、もうひとつの相反する側面、すなわちそれらを「鎮める」特性があったことを論じた[25]。この見地に立てば、ヴィズルというオージンの異名は、次に続く rógstarkr「勇猛果敢な」という語と相関的な意味内容をなす。残る問題は reið の意味だが、これと同系の古英語 rád の「旅」に関するルーン詩は、いずれも「馬に乗る旅」を基本主題として歌いながら、同時に「海を行く船旅」を間接的に詠みこんでいる。

(7)　馬で行く旅（Reið）は　乗り手には幸せ
　　早く路を駆けゆけども　馬には苦痛　（古アイスランド語のルーン詩）

(8)　馬に乗る旅（Rád）は　館の諸人にとりて
　　心地よいが困難をきわめる、　力強き馬に座して
　　長き行程を　進みゆく者にとっては。　（古英語のルーン詩）[26]

古英詩における brim-hengest「波乗りの馬」、エッダ詩の vág-marr「波の馬」はいずれも「船」を表すケニングとして用いられていた。また「ライヴィル王の馬（hestr）に乗って揺られゆく（ríða）」という表現は、実際には海上を「船で進む」ことを意味した（「レギンの歌」16）。このように「揺られながら進むこと」（動詞 OE rídan ; ON ríða）を共通の中核として、馬と船の間には古代呪術に基づく緊密な観念連合が存在していた（拙稿 1999 b 参照）。[27]

さて、(6)の碑文に彫られた reið-Viðurr（原語 raiþ: uiþur）の意味を解く用意がようやく整ってきた。先述したように、ヴィズルは「戦いの嵐」を呼ぶオージン神の異名である。そうすると、reið は「馬または船に乗り、揺られゆく旅」だが、「海と陸における遠征」をさしている。オージンの神威を身にまとい、óðr「激情」に駆り立てられ、戦闘を繰り広げた勇士といえども、いまやこの地下に葬られ、「隠されて」いる。「旅ゆくヴィズル」という名誉あるオージンの異名はかの戦士にこそ与えて然るべきだ、とルーン碑文の作者は考えたに相違ない。かれの名声が時代を超えて伝承されてゆくことを祈願しつつ。以上の議論をふまえれば、この碑文に使用された iarmun-krunt「広大なる“Grund”」という用語は、「大地と大洋」の両方の領域を包括する概念を有していると解すべきだろう。

IV

これまでの考察から、名声の確立あるいは支配権・統治権の拡充という文脈の中で、限定詞 eormen-（ON jörmun-）が grund と結びつきやすいことが分かった。また grund という語そのものの中に「大地と大洋」を包括する概念が含まれているという見当がついた。以下はこれら２つの用語について、特定の言語に限定せず、ゲルマン諸語に共通の概念をさす場合には

Jörmun-と Grund の名で大文字表記することにする。まず古英詩を中心として幾つかの Grund の用例を拾ってみよう。

(9)　　たとえ天なる神が
今ここから私に　　海を渡り
潮路を進むよう命じるとしても、...
　　(中略)... わが心はよもやそれを疑うことはない、
それどころか私は“地の涯て”までも行くであろう、　神の意思に
かなうのであれば。　　(Genesis 830-35) [28]

(10)　　第三の者ども、
呪うべき罪にけがれた者ども、　欺瞞にみちた暴君たち、
邪悪な輩どもは　　生前の行いゆえに、
業火さか巻く“奈落”に落ち、　　炎に包まれ、
燃えさかる火の縛めに捕らえられるのだ。　　(Elene 1298-302) [29]

(9)における grund は、水平的な意味での「海原」(sæ; flod) との対立概念として把握しうる。キリスト教詩人は　ここでは「創世記」の楽園追放から題材を採り、アダムの口からイヴに向けて発せられた信仰激白として記している。私アダムは、主なる神の意思と命令であれば、「大いなる潮の流れ」(833) を渡るばかりか、はるかなる「地の涯て」に降りてゆくことも辞さずと。(10)もキリスト教の影響が色濃い用例であり、grund は同じ「地底」であっても、呪詛すべき罪にけがれた者が落ちてゆく「奈落」を表わし、恐るべき業火に責め苛まれる「煉獄」をさしている。この宗教詩の数行前で、この世での生を終えた者たちのことを、すべて一括して「広大なる Grund において生き長らえてきた者どもはそれぞれ皆」(1287 − 89) と表現している。したがってこの Grund (1289) は、現世の生活圏として「そこかしこに人が住む大地」をさしており、「第三の者ども」と総称された、最も邪悪で信仰心の無き者たちが、その死後に行き着くべき「煉獄」としての Grund (1299) とは明らかに対比関係におかれている。後者の Grund 概念は、キリスト教が伝えられる以前のゲルマン人にはそもそも無縁であった。キリスト教の説教のために供用されることによって、本来の伝統的な Grund 概念が変改されたのではないかと思われる。9 世紀の古サクソン語の詩歌『ヘーリアント (救世主)』にも「煉獄」を Grund で表わす類例が認められる。

(11)　　この世にも天の王国に似た営みがある、
海原にて魚を捕らえようとして　　人が海の中へ
網を投げ入れると、　　よき魚と悪しき魚の
両方が網にかかる、　　浜辺まで曳航し、
獲物の陸揚げとなるのだが、　　その後はじめて選り分ける、
よき魚は砂地におき　　そして他のものは広き波間へ
ふたたび“海の底”へ返してやる。　　支配主なる神が
かの栄えある日に　　人の子らになし給うこともこれに同じだ：

"広大な地にあまねく住む人々"を　　みな集め給い、
天の王国にふさわしき　　義なる人らを選び出し、
呪うべき者らは　　地獄の火が逆巻く
"奈落の底"へ送りこまれるのだ。　　(Heliand 2628-39) [30]

この12行のうちにgrundが2度使用されている。最初のgrund（2633）は、人には不要な「悪しき」魚が「浜辺」から海に捨てられ、「ふたたび」(eft) 帰りゆく「海底」をさしている。この場合のGrundは海底のある狭い領域をさすのではなく、「広き波間」(uuidan uuag: 2634) の語句と相関的であるから、茫洋たる海原の下に「どこまでも広がり続く海底」を意味している。魚たちは「ふたたびそのgrundへ行く」ように仕向けられるという表現からしても、Grundは魚たちの故郷とでも言うべきであろうか。これに対して、二度目のgrundは、キリスト教の概念に転用され、「煉獄」の在り処を説明するための代表的な一語になっている。義人が召される「天の王国」とはまさに正反対に、「奈落の底」なるGrundはまさに地下の底無しとして位置づけられている。ここではGrundが単独で表われているが、helli-grund「地獄の地底」(1491 ; 2601) という複合語としても使用されたのも、理の必然といえよう（OHG hella-grund; OE helle-grund)。Grundの基本概念は、「地底」と「水底」であったが、キリスト者はこれを「業火の逆巻く奈落の底」の意味に変改し、ある種の脅迫観念をもって、異教徒には改宗を迫るための格好のことばとして多用したのであろう。

興味深いことに、上の詩歌にはJörmun-と同系の用語irmin-thiod「広大な地にあまねく住む人々」(2636) が置かれている。「支配主」なる神がこれら「すべての民」について、義人と呪詛すべき罪人とに選別されるという文脈で用いられている。ここでのirmin-概念は基本的には「水平的かつまた全方位的な包括性」を表わしている。そしてまたしてもGrundとJörmun-の両概念があたかも基本的に一致するかのように並置されている。そこでひとつの作業仮説をここで提示しておきたい。Grund概念は元来、「地底」と「海底」とに分別されるものではなく、総じて「大地と大洋の両方の領域において"根"として伸び広がるもの」だったのではないか。このように推定しうるGrund概念を「世界の根源」という意味をこめて「根の領域」と表記することにしたい。

さて、Grund概念を追究するうちに「地獄」の観念が浮上してきた。異教ゲルマン古来の「あの世」観を代表するのがHelという言葉である。Helは北欧神話では「九つの世界を支配する死の女神」であり、「死界」そのものをも指す言葉だが、語原的には「死者が隠されるところ」(動詞 *helan「隠す」に由来）を意味した（水野 1977）[31]。Nifl-helは文字通りには「霧に煙るHel」であり、「暗くて寒い地下世界」として捉えられており、キリスト教によって導入されたような「恐るべき業火の逆巻く煉獄」というイメージは元来けっして無かった。ヤーコプ・グリムによれば、Helは元来、何ら死をもたらす女神でも邪悪な霊を表徴するものではなく、亡者の霊魂を「受け取り、拘束する」機能を持つものにすぎなかったとされる[32]。しかし北欧神話の中でのヘルは、邪悪なロキの娘にして、あのミズガルズ大蛇とは兄妹の関係に置かれており、本来の地位から下落し邪神化させられている。ヘルのところへ赴く者は「病死者と寿命が尽きた者のみだ」と記され、「万物の父」と称されるオージンはその神力を行使し、およそありとある「諸悪と飢餓と災難」などがヘルの館に住むように仕向けたという

(Gylf 34)。しかしその例外がロキとホズルの協働によって殺されたバルドルであろう。そもそもバルドルは、母神フリッグの呪術によって「不死身」と化していた。だがロキの術策と行動がその母神の呪術を打ち破るところとなった。すなわち、ヴァルホッル（「戦死者の宮殿」）の西に生えている「若き」宿り木だけには、この世で唯一、呪術をほどこさなかったという秘密がほかならぬ母神の口から漏れでたとき、ロキはそれを入手するためにヴァルホッルに急行した。そして宿り木を携えたロキは、先述したように、mann-hringr「円形の集団」をなす神々のもとに帰参している。その集団の真ん中にはバルドルがいた。ただひとり、盲目のゆえに、その「円形の集団の枠外」に立っていたホズルに宿り木を手渡し、ロキは射るべき方角をホズルに教えた。こうしてホズルがそれを射たとき、「円形の集団」の真ん中にて「不死身」を誇っていたはずのバルドルが、一見「事故死」と思わせるような巧妙な手口で殺されている。

さて、女巨人ヒュロッキンの力によってバルドルを葬送する船 Hringhorni は海に進水した直後、妻ナンナは「悲嘆」（harmr）のあまりに、その現場で衝撃死をとげた。彼女は荼毘（だび）に伏されたが、バルドルの愛馬も同じく火葬の薪（bál）に上げられた。その時に父神オージンは黄金製の魔法の腕輪ドロイプニルを火葬の火にくべたという。これらの記述にも見えるように、並み居る神々や巨人たちの臨席のもと、「バルドルの亡骸はその船へと運び入れられた」と明記されている一方で、その妻ナンナの遺体は、バルドルの愛馬およびオージンの魔法の腕輪とともに火葬（brenna）の炎にて焼かれたと併記されている。したがってバルドルを載せた船も海原を進んだのちに、やがては炎に包まれ、海の藻屑と消えてゆく光景を思い描くことができる。ところが、このような葬礼の描写がなされる以前に、バルドルを Hel から連れ戻すための使者を募ったことが記されている。その使命を引き受け、八本足の馬スレイプニルをオージンから借りて、Hel-vegr「冥府への道」を駆けたのはヘルモーズだった。あたかも最初から、死んだバルドルの赴く先は冥府の女神ヘルの館であることが分かっていたかのような筆致である。ヘルモーズはその旅の途中、ギョルという河にて橋の見張り番をしていた女性に「ヘルに至る道」を尋ねている。すると「ヘルへの道は北の方角を下ったところにある」という答えが返ってきた。案の定、ヘルモーズはそこへと馬を進めると、やがてヘルの館に到着した。そして広間に入るとバルドルは「誉れの席」（öndugi）に座っていたという[33]。その後ヘルモーズはバルドルの返還を申し入れ、ヘルは「世界中の万物が死せるバルドルのために嘆くこと」という条件を提示するのだが、結局はこれを完全に満たすことが出来ずに、神々の努力もむなしく、バルドルの蘇生は実現しなかったという（Gylf 49）。

上の記述と議論を総合すると、バルドルは海原のさる場所でその船もろとも沈んでいったはずであるのに、なぜか、蘇えりの可能性を残しながら、女神 Hel の館に滞在している。使者ヘルモーズとバルドルは兄弟だと記され、バルドルはヘルモーズが Hel を去るときに「その館の外まで案内した」ばかりか、魔法の腕輪ドロイプニルを父オージンに「思い出の品」（minjar）として返還することをヘルモーズに依頼している。そのとき、妻ナンナも彼の傍にいて、義母フリッグへの贈り物をヘルモーズに委託している。ということは即ち、「海底」としての "Grund" と「北方への下り坂」のかなたにある Hel の世界は、どこかで連結していると考えざるをえまい。

そこで考察対象を古英詩『ベーオウルフ』に移し、Grund「水底」の用例に探りを入れてみよう。

(12) その穢れた害敵は
猛り狂いつつ腕力で　私を羽交い絞めにし、
“海底”へと引きずりこんだ。　(Beowulf 553-55)

イェーアト国（南西スウェーデン）の勇者ベーオウルフがまだ少年の時、ブレッカと競泳をした。「冬の海」という現実には起こりえない話にはなっているが、ベーオウルフの弁によれば、激しい波にもまれること「五夜」に及び、ついに両者は離ればなれになり、「海の魚どもがいきり立ち」ベーオウルフを襲撃してきたという。上の訳語「穢れた害敵」はその「魚ども」のうちの特に手ごわい一匹をさしている。魚は「海の怪物」(mere-deor) とも表現されてある。若き勇者は Grund「海底」に引きずり込まれそうになるところを、「闘いの剣」で防ぎ、ついにはその「怪物」を「みずからの手で討ち果たした」といささか誇らしげに述べている。Grund はここでは単一語で表われているが、数行あとには複合語 sæ-grund「海底」(564) が置かれている。

(13) 奴ら邪悪な破壊者どもは　“海底”の近くにて
祝宴に集い　この私を喰らうなどという、
喜びを存分に　味わうことが出来なかったのだ。　(Beowulf 562-64)

「邪悪な破壊者ども」は一見したところ奇怪な語句だが、ベーオウルフを襲った魚の群れを擬人化した表現である。「海底」にて「祝宴をはる」という魚たちのもくろみは、ベーオウルフの反撃が功を奏したので、実現しないまま終わったことを語っている。次の用例は、怪物グレンデルの母と対決するために、勇者ベーオウルフがその根拠地としての「水底」に潜入してゆく場面である。

(14) 逆巻く波が
戦士をのみこんだ。　彼がかの“水底の広野”に
到達する頃には、　一日の大半が過ぎていた。
戦いの血に飢えつつ　殺戮を求めて荒れ狂い
その水の領域を　五十年のあいだ治めていた奴は、
ただちに気づいた、　見知らぬ人間が
上の方から　物の怪の住み処を探っているのを。(Beowulf 1494-1500)

「怪物グレンデルの母」とされる女怪は、「その水の領域を五十年も統治していた」と記されているが、この水域が海底か、湖底か、あるいは沼の底かで議論が分かれている。私はそうした従来の諸説を検討しながら、むしろ多義的なままに留めおいた方がよいと判断し、mere-wif「水界の女」(1519) と称されたこの女怪を「湖、沼、海などのありとある水を司掌する魔物」と定義づけ、古来の冥府女神 Hel の姿が部分的に投影されていると論じたことがある（水野 1977）[34]。その自説を踏襲してゆきたいと思うので、これに関連する文脈での Grund を「水底」と訳しておくことにする。

さて、ベーオウルフがほとんど一日をかけて到達した「水底」は「恐るべき怪物どもの住み処」とみなされ、「残虐な；邪悪な」などを意味する形容詞が並べ立てられている。しかし、重大な語句が挿入されていることにもっと注目して然るべきだろう。それはとりもなおさず、上では便宜的に「水底の広野」という訳語を当てた grund-wong である。OE wong または wang のゲルマン同系語（Got wags; ON vangr; OS wang など）が異教時代の「楽園」を意味することについては、すでに学者の間では知られていることだが、16 年前に、関連語彙の用例を基にして古ゲルマン人が思い描いた「楽園の原風景」を再構築する試論を提示した[35]。そこで述べたことの繰返しは避けるべきだろうが、論をつなぐために若干紹介しておきたい。

たとえば古サクソン語の宗教詩『Heliand（救い主）』では heban-wang が 11 回も使用され、逐語訳すれば「天なる野原」だが、いずれも「神の王国としての至上天」をさしている。その他の類例としては godes wang「神の野原」や groni godes wang「緑なす神の野原」などの語句があり、信仰あつき義人のみが死後に召され、永遠の命を享受できる「天なる神の楽園」を意味していた[36]。いわばこれらの用例は、キリストの教えを説く際に、異教の楽園観念を代表する“Wang”ということばを到底無視できず、むしろそうした既存の古来思想を布教活動に利用したことを如実に物語っている。拙稿で明示したように、Wang の本来の概念は、「幸と富と健康に恵まれ、光あふれ緑なす、海のかなたの常世郷」であり、また「絶えず憧憬されるべき楽土であり、この世に生命を投げ返す、死と再生の広野」と定義しておいた。ただし英雄叙事詩『ベーオウルフ』の中では、複合語を含めた wang の 15 の用例のうち、8 例は明示的あるいは文脈上「海辺の地；水辺の野原」を意味し、5 例は太陽または黄金によって「輝きわたる野原」の意味で用いられ、本来の「光あふれ緑なす楽園」の意味がかろうじて残っていることを示した（水野 1984）[37]。一見その“例外”と思えるものが上記の grund-wong「水底の広野」であるが、例外と見るよりはむしろほとんど衰滅した「古義」の残影とみなしておきたい。というのは、同じ grund-wong が 2588 行では、「その“大地の野原”を捨ててゆく」という表現が「この世を去る」意味で使用されているからである。すなわち、人間の生活圏としての Grund「大地」と、おそらく特定の選ばれた者のみがその死後に赴く「水底」の Grund が古ゲルマン人の思想体系のなかでは連続していたことの証左となりうる。

とりわけ注目すべきことに、grund-hyrde「水底の守護者」（2136）という用語が“勇者”ベーオウルフによって退治される「恐るべき女怪」、グレンデルの母をさす言葉として使われている。たとえば brim-wylf「水界の狼」（1506 ; 1509）などの呼称が与えられ、英雄によって殺されるべき怪物にさせられてはいるものの、北欧神話において「九つの世界の支配権を与えられた」冥府女神ヘルがその本来の姿であったと推定しておくことにする。そして同じくベーオウルフによって討ち果たされる怪物 Grendel はその息子だが、従来は定まった語原解釈がなかった[38]。しかし私はその名が Grund「水底」に関連し、語尾-el は「～に帰属するもの」を意味していることをここで強く主張しておきたい。あとでより詳しく述べるが、Grund の原義は「砂地」であり、典型的には海底の「平原」（wang）に広がりわたるものをさしていた。いわば北欧版の、ひいては古ゲルマンの「根の国」は、海底と地底をつなぎ、両者を包括する概念体系を有していたのである。

V

古ノルド語の同系語 grunnr にも「水底」の意味がある。注目すべきことに、ソール神が海にて、ミズガルズ大蛇を釣り上げる神話の中で、この語が三回用いられ、いずれも「海底」を意味している。ソールはひとりの若者の姿で巨人ヒュミルを訪問し、その巨人が飼っていた Himinhrjótr という名の一番でかい牛の頭を餌にして、ふたりで海に漁に出る話になっている。ソールは船尾に座して漕いだので、ヒュミルが驚嘆するほどの勢いで船は進み、またたく間にヒュミルのいつもの漁場に着いた。そこでヒュミルは、これ以上行くと、ミズガルズ蛇が出没する危険区域に入ると警告するのだが、ソールは、もう少し漕いでみようと言って、さらに漕ぎ進めたので、巨人は非常に不愉快だった。その話の続きの粗筋を以下に記しておこう。

(15) やがて櫂を上げて舟をとめ、ソールは頑丈な釣り糸とそれに見合った釣り針を用意した。そして針に例の牛の頭をつけ、海に投じたところ、「その針は海底（grunnr）にまで届いた」という。そこで、次のような仕方で、「ソールは、以前にはウートガルザ・ロキによって自分自身が愚弄されたように、今度はそれに負けず劣らず、ミズガルズ大蛇を嘲弄した（ginna）」と記されている。

ミズガルズ大蛇は牛の頭に喰らいつき、針が喉の奥に刺さった。蛇は暴れに暴れるが、ソールも「憤激して」、負けじとばかりに、「神力」（ás-megin）を発揮して足を踏ん張った。すると、「かれの両足は舟底を突き破り、海底（grunnr）にまで達して踏ん張りつづけた」という。そして　そのままグイグイと釣り糸をたぐりよせたので、大蛇は舷縁に浮かび上がった。そのとき、ソールが蛇を睨みつけ、蛇の方も下から毒を吐きながら睨み返したのだが、「そんな恐ろしい光景は直接目にした者でなければ分からない」と付言されている。

巨人ヒュミルは、その大蛇の恐るべき形相と舟が浸水するのを見て、完全にパニックに陥り、ソールがハンマーを振り上げた瞬間に、ナイフでソールの釣り糸を断ち切った。それで蛇は海へ沈み逃れた。しかし、ソールはその後ろからハンマーを投げつけたので、「ハンマーは海底（grunnr）付近で蛇の頭を討ち落とした」、と伝えられている。しかし一方、この神話をここで語って聞かせているハゥル（「高き者」の意：オージンの異名）は、「ミズガルズ蛇はまだ生きていて、世界を取り巻く大海にひそんでいる」と述べている。

さて、ソールは拳骨を振りあげ、ヒュミルの横っ面を殴りつけたので、巨人はその足の裏が見えたほどの勢いで舟縁からぶっ飛んでいった。ソールの方はと言えば、「海岸まで徒歩にて戻った」と記されている（Gylf 48 の一部要約）。

牡牛の名前 Himinhrjótr は「天を突進するもの」の意味だが（但し写本によってその名が異なる）、この神話では釣りの餌にさせられ、その頭部だけ「海底」に達したというのだから、一種の諧謔の意が込められている。毎朝、神々は「ウルズ（運命）の泉」の近傍に定め置かれた、裁きの法廷に参席するために馬を走らせるとき、ソールのみは「徒歩にて河を渡る」とされる（Grm. 29）。最近、拙論を設けたように、「馬に乗る」（ríða）他の 12 名の神々と、河を「徒歩渡る」（vaða）ソールとの間には決定的な相違がある[39]。上記の神話の結末において、ソ

ールが「海を徒歩で渡る」話は、河を渡る雷神ソールの神話と相関関係におくことができる。すなわちソールは、海、川、あるいは雷雨を問わず、「水」と豊饒を司る神であった。ソールの好敵手にさせられ、大洋の只中に棲まわされているミズガルズ蛇は、したがってソール自身の「第二の自我」(alter ego) であると言える。これら敵対者の間の親縁関係は、後述するように八俣大蛇とスサノヲの関係と近似している。

古ノルド語 grunnr は、古英語、古サクソン語、古フリージア語に共通する語形 grund、および古高地ドイツ語 grunt と同系であり、古ノルド語を除けば「海底」と「地底」の意味を両方ふくんでいる。しかし、「奥深いところ；底無し」という意味では必ずしもなく、「平原」と「大地」という水平的な領域をも指しうる。したがって、古ノルド語の関連語彙 grunn がもっぱら「浅瀬」という意味で使用されたことも、一見奇妙な印象をうけるが、古義のうちの水平的な意味のみが残存したと考えれば納得がゆく。「深海の底」(grunnr) に両足が届いたソール神が舟を捨て、そのまま徒歩にて海辺へ帰るという神話は、裁きの場に通うために、「河の浅瀬」(grunn) を毎日のように徒歩するソール伝承の変形であると言えるかもしれない。

このような北欧神話における退治する者と退治されるものとの関係は、日本の神話に照らせば、スサノヲ神と八俣の大蛇との関係に近接している（水野 1987）[40]。『古事記』によれば、神界を追放（「神逐ひ」）されたスサノヲは、出雲の肥の河上をさかのぼって、折しも人身御供にされつつあったクシイナダヒメを救出すべく、八俣の大蛇を退治したことが記されている。クシイナダヒメについては『書紀』では奇稲田姫の字を当てているので、元来、「稲田の神や酒の神に奉仕する巫女」の性格を有していたと説かれ、八俣の大蛇は「年ごとに来臨する豊穣神」であり、本来的には「神酒をもって饗応されるべき」畏怖すべき神であった、という解釈が与えられている（尾崎暢殃）[41]。「元来、神の訪れを待ちうけて神の妻となるべき」クシイナダヒメというひとりの女性をめぐり、対立・闘争の関係におかれてはいるものの、八俣の大蛇とスサノヲには水神・穀神という共通した性格があることを指摘した次田真幸の説も有名である[42]。私はこれら日本神話に関する諸説をふまえ、北欧のバルドル殺害神話を「異人による蛇神殺し」として定義づけ詳述したことがある[43]。

むろん、ソール対ミズガルズ蛇の神話には両者の媒介項としての女性が登場せず、必ずしも同一線上で論ずることはできない。しかし、ソールがアースガルズの守護者であるのに対して、大蛇はウートガルズ「外つ国」への境域を支配する存在者であり、明らかにここにも機能上の一致が認められる。また雷神ソールは風と嵐を司る神としての特性を有することは自明だが[44]、同様に、スサノヲにも「吹きスサぶ」嵐とそれを「鎮める」（スサぶ）神としての原姿を認めることができることを近稿にて論じた[45]。「海原を知らせ」という父神イザナギの命を拒み、スサノヲが行くことを希求した「根の堅州国」あるいは「底根の国」は、ソール神が「遠海にて」その両足で踏ん張った Grunnr「海底」と類似しているように見える。だが、今の段階ではある種の直感にとどまるので、検証を要することは言うまでもない。

『書紀』では大蛇について「頭尾各八岐あり」と記されている。「八岐」は「八衢（やちまた）」すなわちあらゆる方位への分岐を示すであろう。「八頭」と「八尾」は、それぞれ八方の世界に充満・蔓延する「生」と「死」、あるいは「豊穣」と「凶作」、「始まり」と「終わり」を象徴していると考えておきたい。「八俣」の大蛇に対する勝利はしたがって、スサノヲが全方位の世界に向けて豊穣を実現し、生を充満させる呪力を掌握したことを示していると同時に、

まさしく「荒（スサ）ぶる神」または「祟り神」として死と凶を招く、両義的な存在と化したことを意味している。言い換えると、この出雲の地での偉業達成によってはじめてスサノヲ神は、「根の国」すなわち「この世に豊穣と凶、生と死を送り込む根源の地」の統治者となるべき資格を得たことになる。「切り散（はふ）りたまひしかば、肥の河血に変りて流れき」とあるように、スサノヲが古刀にて大蛇を分断したということは、その中に宿る生と死の呪力を分別し、いずれをも統御する力を獲得したことを意味している。

「神逐ひ」の宣告は、日向にて禊ぎをした父神イザナギ、および高天原の「八百万の神の共議」によって、二度にわたって下されている。スサノヲはこれら二つのカムヤラヒによって、日向ー高天原ー出雲という地点を移動し、聖なる三角形を描くことを要請されているかのようである。父神より発せられた最初のカムヤラヒは、同じイザナギが妻イザナミに対して黄泉比良坂にて宣告した「事戸渡し」と機能的に一致している。後者の夫婦絶縁の「誓約」（紀には「絶妻之誓」とある）によって、この世とあの世の画然たる境界が設定されたように、スサノヲに対する父子絶縁の処分は、結果的に「高天原と根の国」の対立の図式を発生させた。このカムヤラヒを宣告したのち、『記』によれば、イザナギは「淡路の多賀」に鎮座したという。あたかもここにおいて父神の役割りを終えたかのように。

そして、ほかならぬアマテラスが統治する「高天原」において、よろず神々の「共議」をもって二度目のカムヤラヒが宣告されたとき、「高天原と根の国」の対置の図式がより鮮明化した。そればかりか、「諸々の神」がスサノヲに対し、「天上に住むべからず。また葦原中つ国にも居るべからず。すみやかに底根の国にいね」（紀）と厳命を下したことによって、はじめて高天原ー葦原中つ国ー根の国という、「垂直的」な三分極の構造が確立したと言える。しかも、このときスサノヲには罪祓いとして「千座の置戸」が科せられている。「千座」（チクラ）は単に贖罪の「物を置く台」の「数の多いこと」（体系本、補注）を指すわけではあるまい。あのイザナギが夫婦絶縁を言い渡したときに、黄泉の国に至る「坂路」をふさぐために用いた「千人所引きの磐石」（紀）と同じ機能を果たしていると見るべきだろう。ちなみに『記』によれば、「千引の石」を「中に置きて」、それぞれが向かい合って「事戸」を言い渡したと記されている。「置戸」と「事戸」が対応していることは申すまでもない。さらに大胆なことを言えば、「千引の石」に比定しうる「千座」も、大いなる磐をさしているのかもしれない。

天上界に磐というのは一見いかにも奇妙な想像とはなろうが、古人の観念のなかで、千座のクラと「磐」との連想が容易であったことは、たとえば典型的には、皇孫ホノニニギの山上への降臨を語るに際し、「天磐座（あまのいはくら）」なる言葉が用いられていることからも知れる。「皇孫、すなわち天磐座を離ち、…（中略）…日向の襲の高千穂峯に天降ります」（紀）とあるように、高天原の「堅牢なる磐の神座（かみくら）」を出発点となして、ホノニニギが日向の霊峰に顕現されたというのである（水野 1992）[46]。もし上記の論法が正しければ、いずれ「根の国」の主となるスサノヲは、「神逐ひ」を宣告されたときに、みずからが二度と高天原に戻ることのないように、「千座」なる巨岩を、ある境界地点に定め置く（「置戸」の原義）ことを強いられた、と読める。そして然るべき後に、その「千座の置戸」が天磐座の基盤をなすものとなった、と解するのは言い過ぎとなろうか。

スサノヲの統治領域としての根の国については西郷信綱、神野志隆光、その他の諸賢によってさまざまな解釈が打ち出されてきた[47]。日本神話の空間構造が「高天原ー中つ国ー黄泉の

国」の垂直軸と、「西の出雲ー中つ国（大和）ー東の伊勢」という水平軸から基本的に成り立っていることを示した荒川紘の解釈はとくに注目に値する[48]。そのような「根の国」の諸説をふまえつつ、Grund 概念のさらなる解明をめざすためには、やはり水平軸と垂直軸の図式がどの程度、古ゲルマンの世界観において妥当しうるかを調べることが必要だろう。

VI

北欧神話のミズガルズ（Miðgarðr）は文字通り「中心の地」を意味し、「神々の国」なるアースガルズ（Ásgarðr）、および巨人の国としての「外つ国」なるウートガルズ（Útgarðr）の間の「中間」に位置づけられていた。このように古北欧の世界観は、基本的に「内ー中心ー外」の図式によって明確に区分けされた構造を成している。便宜的にミズガルズを北欧の「中つ国」と命名しておくが、むろん問題はさほど単純ではない。garðr は動詞 garða「囲む」と関連し、(1)垣根；壁、(2)囲い地、(3)中庭、(4)住居、(5)砦などの意味を有していた（英語 yard 参照）。したがってミズガルズという概念は多義的であり、通常は人間の居住空間としての「中間に位置する、囲まれた地」を意味するものの、次の記述にみるように、「その周辺を囲む防壁」を指す場合があるので注意を要する。

(16) 大地の周縁部は円形をなし（kringlóttr）ており、その外側は（útan）深い海で取り囲まれている。そしてその海辺に彼ら（神々）は巨人族が住むべき土地を与えた。しかし大地の内側には（innan）巨人たちの反撃に備えて、世界の周りを囲む防壁（borg）を造りなした。この防壁にはユミルのまつげ（brár）を用い、そこで防壁をミズガルズと呼んだ（Gylf 8）。

原古の巨人ユミルを殺害することによって世界を創出した神々は、その「ユミルのまつげ」によって防壁を造ったというのは一見奇妙だが、ひとつには防柵と巨人のまつげとの形態の類似に基づくアナロジーと解しうる。さらには、巨人族の襲撃に対しては「毒をもって毒を制する」呪術原理に則っていることを拙論で示した[49]。加えて、ここで詳論する暇はないが、邪眼信仰がひそんでいることについても卑見を提示したことがある[50]。いずれにしても、「防壁」それ自体がミズガルズと命名されたという語りを重視しておきたい。この語りによれば、「内」と「外」の世界を分割する中央の境界線がミズガルズであり、「内」なる大地が「円形」を成しているからには、それを取り巻く防壁としてのミズガルズも円いとみなしうる。

「巫女の予言」（3-4 節）の記述によれば、悠遠なる昔、この世には「砂、海、冷たき波、大地、天上」の何も存在していなかったときに、「あったのは原初の虚空ギヌンガ・ガップのみ」とされる。ところが、「ついにボッルの息子たちが　土塊（bjöð）を持ち上げ、栄えあるミズガルズを創った」と次の詩節で記されている。ボッルの息子たちというのは、あのユミルを殺すことによって世界を創成したオージン、ヴィリ、ヴェーの三兄弟をさしている。この語りに従えば、原初のときに唯一存在していたギヌンガ・ガップを基点として、ほかならぬその場所を世界の中心としてミズガルズを出現させたことになる。ちなみにこの神話に相応するスノッリの記述は、「彼ら（ボッルの息子たち）はユミル（殺された巨人の身体）を取り上げる

と、ギヌンガ・ガップの真ん中へと運び、その者（死せるユミル）から大地（jörðin）を創成した」となっており、ここにも「真ん中」（miðr）という語が置かれている。しかも、ギヌンガ・ガップそれ自体が元来、北の極寒世界ニヴル・ヘイムと南の炎熱世界ムスペッルの「中間」に存在していたのであるから、ミズガルズと称された居住地は、まさに「中心の中心」、すなわち二重、三重の意味において神話的な宇宙の「中核」に布置されていたと言える。この視野をもって改めて「巫女の予言」（4節）の語りに注意を向けてみると、最後の1行に重大な語句が置かれているのに気づかされる。

(17) ついにボッルの息子たちが　　土塊を持ち上げ
彼らは栄えある　　ミズガルズを創った。
南より太陽が輝き　　地の石を照らした、
かくして"Grund"には　　緑の草が生い茂った。（「巫女の予言」4節）

15年前の拙稿の中でこの詩節に新解釈をほどこしたのだが、基本的には当時抱いた考えと変ってはいない。先行する詩節に記された混沌と虚無の世界とはうって変わって、大地に降り注ぐ陽光と生い育つ「緑の草」が描かれている。「草」はlaukrと表記され、薬草、より厳密には「大蒜（にんにく）」を意味している。なぜ、この個所にニンニクが登場するかについてはすでに詳しく論じた[51]。その「緑の」（grœnn）草はまさに豊饒を表わし、gróa「生い茂る」ばかりか、grundと頭韻を踏んでいることを見逃すべきではない。いわば世界の「中核」に位置づけられたギヌンガ・ガップにおいて、「生命の根源地」としてのGrundが創成されたことを如実に物語っている。根の堅州国について、「地底の堅い州の国」の意味に解され、「ネは生命の根源を意味し、祖霊・穀霊などあらゆる生命の源の地と考えられたらしい」（体系本の補注）と説かれているが、[52] Grundの基本概念の中には部分的に日本のネの国と共通する観念がふくまれていると言えようか。いずれにせよ、ここに成立したミズガルズは、まさにそのGrundを基点として人間の居住空間たるべく「水平的に伸び広がりゆくこと」（Jörmun-の理念）が祈念されているかに見える。Grundについて過去の拙稿で述べたことを若干補いつつ次のようにまとめてみた。

ゲルマン共通語としての*grundu-の原義は「おし潰されたもの」であるが、印欧語*ghrn̥-tu-「砂地」に遡及しうる[53]。すでに述べたように、OE sæ-grund「海底」、wæter-grund「水底」、mere-grund「湖底」などの複合語があったことからしても、ある圧力が加わって粉々になった「砂；土砂」の意味を想定することは許されるだろう。この見地をもってすれば、先行する詩節3において、「砂も、海もなかった」などと表現しているのも、Grundの成立する以前の原初期の混沌たるさまを「砂と海（海底）の非存在」によって表徴し、詩節4にて歌い上げる「豊饒の根源地」としてのGrundの成立を早くもほのめかしているようにすら思える。ちなみにGot grund-waddjusは家などを建てるための「礎（いしずえ）」を意味したが（新約聖書「ルカ伝」6．49）[54]、現在でも花崗岩、安山岩、片麻岩、そしてある種の石灰岩のほかに「砂岩」が建物の礎石として用いられる（Americana, "foundation" の項）。ただし当時の建物の土台が実際にいかなるものであったかについては手元に資料がない。-waddjusは町の「外壁」の意であるから、grundそれ自体の本義として「下部に置かれ全体を支えるもの；根底」の意を

仮定しうる。したがって Got af-grundiþa および OS af-grundi は直訳すれば「底・無し」の意であるから、いずれも「深淵・奈落」を意味していたことも理解できる（ドイツ語 Abgrund 参照)。これらの語は聖書の文脈で使用されている。たとえば、Got af-grundiþa はギリシア語の a-bussos「底（bussos）が無いこと」の翻訳語であるから、キリスト教の説教のための造語だと考えられる（「ルカ伝」8・31；「ローマ書」10・7)。すなわち Grund それ自体の概念には、本来「奈落」の概念は無かったと思える。ただし、ゲルマン諸語の中では古英語のみ、接頭辞を付さなくても grund が単独で「奈落；地獄」を意味しえた[55]。ちなみに OS helli-grund と OHG hella-grund はいずれもキリスト教によって導入された地獄観念を表わす複合語であり、「大地の奥深きところにある地獄；永劫の懲罰を受ける煉獄」の意味であった。

P. イルコウは、共通ゲルマンの時代において Grund は(1)深み、(2)土壌、(3)谷底；谷間の草原、(4)礎（いしずえ）など、四つの意味を獲得していたと主張し、このうち(1)と(2)の語義が最も古く、特に(1)から「海底」の意味に転用され、ひいては河や湖沼などの「水底」の意味に拡大されたのだろうと推定している[56]。しかし、特に古英語では「大地；土地；平原；国土」あるいは「地上」など、いわゆる「水平的な意味領野」が発達した一方で、「底；海底；湖底」あるいは「地底」、「奈落」、「地下の地獄」など、「垂直的な意味領野」がゲルマン語のなかでも最もよく発達したことがうかがえる。便宜的に前者の意味内容を Grund の「水平性」、後者を「垂直性」と呼ぶことにする。いずれにせよ、この重大な事実を考え合わせると、イルコウが仮説した 4 つの基本義だけでは Grund の意味概念の全体像が浮上してこないように思える。Grund の原義「圧し潰されたもの」を改めて想起するならば、「大地の表面を覆いつくすもの」として「土壌」の意味を捉えるべきことになろう。「水平性」の概念が真に定立するためには、「内」と「外」の分節化を要するが、その媒介項として「中心」概念の成立が前提となる。同様に、「垂直性」の概念は、「上」と「下」の分節化が前提だが、その二項対立を統括するものが「中間」概念である。すなわちこれらの本来、相反する方向性と運動態を弁証法的に止揚するものが、「中心の中心」あるいは「中間の中間」であろう。いわば北欧神話にしばしば表わされる Miðr「真ん中」という極小領域において、宇宙を構成する水平軸と垂直軸が交叉しているとみられる。このような「中間と中心」のまさに核を理念的にかたちづくるものを「中核」と仮称しておくことにしたい。

VII

言いふるされてきたことだが、ミズガルズの概念（Got midjun-gards, OE middan-geard, OS middil-garda, OHG mittin-gard）はゲルマン民族が共有していた世界観を反映している。4 世紀のゴート語聖書では midjun-gards なる用語がギリシア語 *οἰκουμένη*「居住地」の訳語で使用され、airþa「土；陸」と対概念をなしていた。また古高地ドイツ語 mittila-gart もラテン語 mundus「(人間の) 世界」の訳語に当てられ、「大地」を意味する語 erda と峻別されていた[57]。ちなみに古英詩『ベーオウルフ』では、「この middan-geard の多くの民、または部族」(75；1771) という表現で用いられている一方で、「世界中で」(751)、もしくは「世の中」(2996) の意味でも使用されている。したがって古くは「全世界の中心を占める我ら人間の居住地」がミズガルズの基本概念であったが、後代にはより抽象化して「世界」または「世間一般」の意

味に変化したように思える。ただしP. イルコウによれば、前者の古来の基本概念は特に西ゲルマン諸語においては10世紀頃には衰退していたとされる。というのも、あれほど用いられた語が古高地ドイツ語の作品『Notker』には皆無であるからである[58]。これに対して、キリスト教の布教が遅れたスカンジナビアでは、「人間の居住地を世界の中心に据える」異教神話の世界観が最も根強く残ったと言える。

「中心」の概念は当然「周縁」の概念世界を前提としている。中心を確定しようとする意識が働けば働くほど、その概念によって包摂された「内」なる世界と除外された「外」なる世界との分節化がすすみ、ついには明確な「境界線」が設定されるにおよび、ふたつの世界は切り離されてゆく。このような古北欧の世界観を解読するには、山口昌男の記号学的認識論を適用することがきわめて有効であることを指摘した（水野 1987）[59]。山口はきわめて明晰に、人間の思考パターンに普遍的に見られる二項対立の世界像を解き明かした。すなわち、「中心」に布置された「我々」の秩序から他者を排除するメカニズムが働き、意識的または無意識のうちに、「我々」とは対極をなす「彼ら」の世界が「周縁」に描き出されてゆく[60]。拙稿で繰返し述べたように、北欧神話において、人間たちのミズガルズ「中つ国」は、「内なる神々」のアースガルズと、巨人族が住まわされたウートガルズ（「外つ国」）との中間に置かれており、その「内と外」をしばしば往来する者として巨人退治の神ソールと邪悪な神霊ロキがいる。

このような「内と外」という対立概念は、農民や漁民たちのごく日常的な生活のレヴェルより発しているように思う。K. ハストルップの近著によれば、inni と úti の用語は、あるひとつの農場を垣根で囲った「内側」と「外側」を表わし、その農場内の敷地も innihús「人間の住む、内なる家々」と útihús「家畜小屋と飼料小屋などの、外なる家屋」というふうに区別されたという[61]。またハストルップによれば、たとえば西ノルウェーのフィヨルドの民にとって、元来は航海に出ることは西方の「外なる世界への旅」を意味し、東方の「内なる世界」へ向かう陸路の旅と峻別されていたとされる。彼らの言葉で út-norðr「外なる北」が「北西」、út-suðr「外なる南」が「南西」の方角を意味し、これとは逆に land-norðr「陸の北」が「北東」、land-suðr「陸の南」が「北西」をそれぞれ意味したのも、「西方への航海」と「東方への陸の旅」という伝統的な視野を反映したものとして説明が可能となる。参考までに、スカンジナビアの東部地域では、upp「上へ」が「海辺から内陸への旅」を表わし、inn「内へ」が逆に「陸から海辺へ向かう旅」を表わしたが、後者は時折 framm「前へ」などの語句に取って代わられたという[62]。興味深いことに、その東部においても út「外へ」はフィヨルドを抜けて「その外に広がる東の海に出る」ことを意味していた。

同じくハストルップは、中世のアイスランドにて流布していたオローシウスの地図（5世紀作）に着目した。そこには世界がヨーロッパとアジアとアフリカに三分割され、全体がひとつに繋がりながら、周りが大洋で囲まれたように描き出されている。そこで彼は、この古地図の基本概念が「円形をなす大地」という北欧神話の宇宙論と合致したので、当初の段階ではアイスランド人に容易に受け入れられたと推察している。ところが、その後、グリーンランド、および北米の一部（Hellund; Markland; Vinland）などの発見が相次ぎ、海のかなたに陸地があることが鋭く意識されてくるにつれて、伝統的な地理観は修正を余儀なくされたと説いている[63]。しかしながら、それでもなおアイスランド人は、「円形の大地」という古来の考え方を捨てきれず、Hellund と Markland を西方の新しい島として位置づけ、Vinland をアフリカの一部

と誤認しながら、それらを全体として円形の世界地図のなかに組み込もうと腐心したようである。それゆえに、ヨーロッパ・アジア・アフリカの三つの区域に加えて、新たに óbygðir「無人の荒撫地」を彼らの地図のなかに書き加えながらも、それらすべての円き大地の周縁を取り囲む ut-haf「外なる海」、いわば古来の神話的な世界観の外枠については、これを重視し保持しつづけたのである（ハストルップの著の地図5参照）[60]。

これらの主張は、北欧神話に描き出された「内ー中心ー外」の世界観を解くための重要な鍵を提供してくれる。『散文のエッダ』の「序文」によれば、アジアには「すべての美と光輝と、黄金と宝石などのこの世の富」があり、その地にこそ「世界の中心」があり、「他のいかなる土地よりもあらゆる点において、うるわしくて素晴らしい」などと記されている。そしてその地に住む人間もまた「すべての祝福を受け、知恵と力、美とあらゆる技量に恵まれている」という記述が続き、その「世界の真ん中」にかつて繁栄をほこったトロイアの王国があり、「いまはその地をトルコと呼んでいる」と記し、後に北欧にて神として崇められることになるオージンは、元来その王家の末裔だったなどと書いている。そしてオージンは一族を率いてはるばる流離の旅を続け、北欧はスウェーデンのシグトゥーナに都を築くにいたることを比較的詳しく書いている。従来より指摘されてきたように、この記述は神を「神格化された人間」とみなすエウヘメリズムであり、無論この記事をそのまま信ずる必要はない。だが、ここにも「中心の中心」という神話的な理念が打ち出されていることを確認すべきだろう。いわば、「内」なる世界から「外」なる世界へ向けての神族の移住にともない、人間の居住地が拡大していったかのような口吻が感ぜられる。その真偽はさておき、「流離する神々」という神話がここで構築されているのだ。先述したように、út「外へ」の運動態は「内陸から海辺」をめざし、さらにはその「外洋を渡ること」を意味していた。あたかもまだ見ぬ「外なる世界」に憧れ、仲間とともに航海に出たヴァイキングたちの精神そのものと重なり合うかのようである。

VIII

さて、eormen-grund（jörmun-grund）の考察から、「広大さ」を示す限定詞 Jörmun-が「大地」ばかりか「海原」をも包括する概念を有していたことが分かった。Jörmun-の基本概念は主として次の4つの項目に区分される。

1．空間的な包括性：広大さ　　2．超自然的な力：大地の産出力；豊饒力
3．時間的な永続性　　4．空間的かつ時間的な普遍性

これに対して Grund の基本概念は、「圧し潰されたもの」を原義としながら主に次の5項目に区分されよう。

(1) 深み：垂直性　　(2) 土壌：大地表面を覆うもの
(3) 平原：大地に広がるもの　　(4) 底：海、川、湖などの基底に横たわるもの
(5) 礎（いしずえ）となるもの

ところが、以下に考察を進める Irmin-sul については、上記の Jörmun-の4つのカテゴリーによっても説明しきれない概念をふくんでいる。ここでは「大いなる天地の柱」と仮称しておくが、結論を先取りして言えば、Grund の意味内容が「水平性」と「垂直性」を兼ね備えていたように、Jörmun-の語義そのものの中に、地平に伸び広がる「水平性」に加えて、天地を

とり結ぶ「垂直性」の概念が包摂されていたと推断しうる。タキトゥスの『ゲルマーニア』2章に次のような記述があることはよく知られている。

> 彼ら（ゲルマーニアの人々）は古来いくつかの歌謡において、――歌謡は彼らのあいだで唯一の伝承（memoriae）であり、年代記（annales）のたぐいなのだが、――大地から生まれたTuiscoと、その子Mannusとを種族の始原として、また創始者として称える。そしてこのMannusに三人の男子があったとし、その子らの名にちなみ、大洋に最も近いものがIngaevones、中間のものがHerminones、その他はIstaevonesと呼ばれている[65]。

マンヌスが「種族の始原」（origo gentis）であるからには、そのトリオを成す息子は三大部族の始祖となったと読める。そもそも『ゲルマーニア』の本章は、「はじめは一部族を表わしたにすぎなかった名称（Tungri）が、次第に勢力を増大し」、やがてすべての民がゲルマーニ（Germani）という名称を「種族全体を表わす呼び名」として用いるにいたったと結論づけている。そしてきわめて注目すべきことに、これら「三部族の始祖」について順々に「大洋に最も近いもの」（proximi Oceani）、「中間に位置するもの」（medii）、「その他のもの」（ceteri）というふうに空間的に位置づけている。つまりローマ側の視点から言えば、まずは北方に広がる海に最も近く、したがって距離的にはローマから最も遠い部族を先にあげ、次に「中間」の部族、および「その他」比較的近い部族というふうに区分されているように見える。しかし、「中間」（medii）という一語に重きをおけば、部族Herminonesがゲルマーニの種族全体の「中心（の中心）」とみなされていたとも読める。この名称については、写本の判読上の揺れがあって、最初の始祖名Ingaevonesの語尾との対応から“Hermiones”と読む説がやや有力であった。しかし、語義の解釈からいえば明らかに“Herminones”の方が正しいとする説に従うべきであろう[66]。すなわちこの語形はすでに幾つかの用例をあげて考察してきたJörmun-すなわち、ゲルマン語 *ermin-「広大なもの」；「偉大なもの」と関連を有する。だが、なぜ、この名称によって包括される部族集団がゲルマーニ全体の「中間」に位置づけられているのか、という由々しき問題が浮上してくる。これまで重ねてきた議論を踏まえると、この用語は「水平的に伸び広がりゆく、呪術的に旺盛なる力」という概念を内包していたとみなしうる。インガェウォーネスが穀物霊イング（*Ingwaz）の名に関連し、ひいては大地豊饒神フレイ（別名Yngvi-Freyr）の崇拝を示唆しているという従来の指摘はおそらく正しい[67]。Ingaevonesは「イングに帰属する者たち」を意味する。これと相似的に、ヘルミノーネスという名も、「*Erminに帰属または帰依する者たち」を意味し、ある特定の神と密接な関連を有する名称であろう。

タキトゥスは既に第1章の冒頭で、「ゲルマーニアは全体として、ガッリア族、ラエティア族、及びパンノニア族からはレーヌス（ライン）とダーヌヴィヌス（ダニューブ）の河によって分け隔てられている」と明言しており、またアルプスの北部、ダニューブ川の南岸に居住していたラエティア族、およびその東のパンノニア族は、ローマが展開した一連の軍事行動によって、紀元前1世紀末にその支配下に置かれている[68]。したがって、紀元後97－98年に制作された著作の本章において、第3の「その他のもの」として一括されたIstaevones族の居住地は、ライン川の東にしてダニューブ川の北に位置すると考えた方がごく自然である。

上のような見方でゆけば、第2の「中間に位置する」部族の居住地は、西のヴェーゼル、中央のエルベ、東のオーデル、これら三河川の中流域あたりを想定せざるを得なくなるだろう。タキトゥスの同著の中から該当しうる部族を探せば、西のケルスキー族、中央のセムノーネス族、東のルギィ族がその候補として浮上してくる。41章に記されたHermunduriという部族も、候補に入るかにみえるが、タキトゥスによれば、「ダニューブの河畔に近くに住み、ローマに忠実である」とされているので、ゲルマン民族全体にとっての真に「中間に位置する」部族とはなりえない。

結論を先取りして言えば、「中間の」部族集団の「中心」に位置するセムノーネス族に焦点を当てることになり、またしても「中核」(中心の中心)の図式が鮮明になってくるのだ。タキトゥスの記録によれば、彼らセムノーネス族は、スエービー諸族の中で「最も古きに遡り、また最も高貴」であり、「皆、ある特定の時期に、父祖伝来の」密儀を執り行なうという。すなわち、「民の代表者が神聖な林(lucus)に一堂に会し」、その地にて「野蛮にして恐るべき」人身犠牲の秘儀が執行されるという。彼らは、「すべての支配者」(regnator omnium)としてひとりの神が「この聖林に臨在している」、と信じて疑わない。タキトゥスの記録は、セムノーネス族の「強大さ」の秘密があたかもこのような信仰心にあるかのような筆致になっており、「百の村里に分かれ住みながら、自分たちこそスエービー諸族の統領(caput)なりという確たる信念が存するのは、ひとえにその"偉大なる集団"に(magno corpore)負うている」、と締めくくっている(39章)。

つまりここに記されたように、定期的に神聖な林に「会同」し、「スエービ諸族の統領」であると自負していたセムノーネス族がひたすら帰依した神は、「民会」を司る神ティウ(Tîwaz)にほかならない。北欧の「正義と法と秩序」の神テュール神がこれに対応する。ドイツ語Dienstag「火曜日」はティウが司掌した*Thingsaz「民会」の日を意味するという説があり[69]、石に刻まれた幾つかの碑文によって、Thingsusは低地ライン流域にも及んだティウ神の異名だということが知られている。そればかりか、英国はハドリアーヌスの堡壁碑文(222-35年)にもMars Thingusの名が見え、しばしばローマの軍神マルスと同一視されながらも、公平な裁きの神としてブリテン島の北部にまでもその崇拝が広がっていたことがわかる[70]。北欧神話では「誓約」と「勝利」の神としての性格が強いテュールの神名は、ゲルマン共通の神*Tîwazに遡及し、さらに語源的にギリシアの主神Zeus、ローマのJovis、古代インドの神Dyausの名と同系である。本来いずれも「天父神」として崇拝されたことは、Zeus-pater「父なるゼウス」、Ju-piter「ユーピテル、すなわち父なるヨーヴ」、およびDyaus-pitar「父なるディアウス」などの呼称からうかがえ、一般には「天の輝けるもの」(IE.*djeus)がその原義であると解されている[71]。したがって印欧系の古き天空神が「ゲルマン民族の間では戦神に変改させられた」などとしばしば説かれているが[72]、充分に道理のあることである。

ちなみに古ノルド語týrは「最高位の神性」を表す総称であり、例えば、týr-spakrは「神のごとく賢い」、týr-hraustr「神のごとく勇敢な」を意味していた。またFarma-týr「積荷の神」は、船人が航海安全を祈願するときのオージンの呼び名であり[73]、Hanga-týr「絞首の神」もオージンの異名ではあるものの、北欧神界への新参の神オージンが古き神テュールの特性を収奪したことを示唆している。たとえば「民会」の中心に置かれる槍は、「正義と法」を司るテュールの神権のシンボルであったが、オージンもグングニルという名の槍を持つ神として知ら

れていた[74]。

さて度々指摘されてきたことだが、古サクソン人はIrmin-sulという「天に聳え立つ柱」を崇拝していた（『サクソン人の事績』I.22）。フルダの修道僧ルドルフの860年頃の報告によれば、その天柱は「すべてのものを支えるかのごとき宇宙柱（universalis columna）」だとされる[75]。またコールヴェイのヴィドゥキントという10世紀の歴史家は、サクソン人がHirminという名の神を崇めていたことを記録しているが、これをローマの軍神マルスおよび間接的にギリシアの伝令神Hermesと同一視している。マルスと同一視されたことを根拠にして、この名称の原形 *Irminあるいは *Ermenがゲルマンの「戦神」ティウの古名であったという推定がなされている[76]。その一方、HirminとHermesとを関連づけるのは、単に神名の発音が偶然似ているからにすぎず、完全な誤謬とみなされている[77]。だが、ティウの「戦神」という特性だけでは、なぜ、"universalis"な柱を立てたか説明がつきにくい。タキトゥスが記録した1世紀末のゲルマーニアにおいては、ティウは「中間に位置する」部族集団に勝利をもたらし、彼らの統治領域いわゆる"Jörmun-Grund"の地平を拡大してくれる「最高神」として崇拝されていたと仮定しておくことにする。外なる世界に覇権を拡充しようとするゲルマン的な侵略・進出の心性は、このような"Jörmun-Grund"の古代信仰にまで淵源するのではあるまいか？

従来おおむね「誤謬」とみなされてきたHermesの特性にこそ、"universalis"の真意を解く鍵がひそんでいると思う。ギリシアのヘルメスは霊魂を冥界に導く役割りをもち、天上界と地下界をつなぐ神であり、その役割りを表徴する「伝令の杖」を持ち、また豊饒神としての特性をあわせもっている[78]。"universlis"な柱というのは、「世界を支える」意味ではなく、Irmin-sul「（時空的に）普遍的な柱」というゲルマン的な概念からの比較的忠実な訳語ではあるまいか。すなわち、古サクソン人が使用した"Irmin"という概念には、「広大な」という水平性に加えて、あきらかに「天と地をつなぐ、長大な」柱を形容する垂直性の意味が含まれていた。あえて言えば、日本神話の「天の御柱」の着想にどことなく近い。『記』によれば、高天原に最初に顕現されたのは「天の御中主（みなかぬし）」の神であり、続いて高御産霊（タカミムスビ）の神、別名「高木の神」が出現したとされる。あたかも宇宙の中心がまず設定されて、その後に万物の生成の根源力（「産霊」）の化身としてのカミが「高く聳える樹木」に降臨したかのような筆致である。ほぼ同様にして、ゲルマンの世界の「中心の中心」に設けられた「大いなる柱」Irmin-sulは、まさしく天なる神ティウ、すなわち種族神としてのイルミン（北欧のJörmun）が降臨する依り代とみなされたのではないか。このように考えてはじめて、「円き大地」から放逐され、「大洋の底」（Grund）にひそむ「巨大なる」ミズガルズ蛇がJörmun-gandr「長大無比なる杖」と命名されていた真の理由を把持できるだろう。

元来、イルミン・スルは、ゲルマン民族の理念的な中核に据えられ、「水平と垂直」の双方の基軸に伸び広がる「普遍的な（universalis）柱」であったと仮定できる。だが、ティウ崇拝の衰退にともない、このイルミン・スルは、北欧神話においては、三つの世界に根を張る「トネリコの世界樹」イッグドラシルに変容することを強いられた、と私は考えている。その枝は「全世界に広がり、天の上に突き出ている」とされ、三つの根はアースの神々、霜巨人、ニヴル・ヘイム（死の世界）のそれぞれの領域にのびていると記されたしばらく後に、「そのトネリコの第三の根は天にある」などと矛盾めいた記録が付されている（Gylf 15）。これではまるで「逆しまの世界樹」ではないか。いずれにせよ、世界の中心に位置づけられながらも、トネ

リコが基本的に表徴するものは「垂直性」であろう。これに対して、この世の外縁に追いやられたミズガルズ蛇は、そのトネリコの中心から八方の世界に向けて「水平的にのびゆく限界の域」を表徴している。不思議なことに、北欧神話の中ではテュール神はほとんど例外的に正当な妻を持たない。確かに「テュールの妻」がいたようだが、あの邪神ロキによって寝取られたともされ（「ロキの口論」40節）、その名前はどこにも記されていない。ロキは、テュール神の妻との間に「子供をもうけた」と半ば誇らしげに語っている。その一方、ロキと Angrboða という名の巨人女との間に、ミズガルズ蛇、フェンリル狼、およびヘルという三種の魔物が生まれたという（Gylf 34）。Angrboða は「悲惨を招くもの」の意だが、加えて、「悲嘆・苦悩を担うもの」として両義的に解釈すべきだろう。とくに後者の名の響きは、まさにテュールの匿名の妻の本性を映し出しているかに見える。思うに、テュールの妻は、この「悲嘆に暮れる巨人女」アングルボザと息子ミズガルズ蛇のふたつの存在に分裂させられている。そこで大胆な仮説を提示したい。古くは Jörmunr と称された天空神テュールのかつての妻神はおそらく大地母神であったであろうが、魔神化させられ、Jörmun-gandr「大いなる魔法の樹」あるいは Mold-þinnur「大地の帯」の呼称を与えられ、「海の底根の国」なる Grund に放逐されたミズガルズ蛇の姿に部分的に変貌させられてしまっていると。

ロキとアングルボザから生まれたこれらの兄妹が成長してくるにつれ、神々は予言力によって、「大災難と不幸」が起こることを察知した。そこでミズガルズ蛇については、オージンが「全地を取り巻く深い海のなかに投げ込んだ」。しかしそれでも、その蛇は成長をとげ、「大海の真ん中」に横たわり、「自分の尻尾を噛んでいる」とされる（Gylf 34）。先述したように、まさしくヨルムン・ガンド（Jörmun-gandr「長大無比なる杖」）と呼ばれた由縁である。ここでの「大海の真ん中」は、ウートガルズという「外つ国」へ潜入するときの境界の意味を有するだろう。ちょうど「ユミルのまつげ」で造られた防壁が「ミズガルズ」と呼ばれていたことと相関を成すかのように、ミズガルズ蛇は、「外つ国」に追いやられた巨人族側にとっての「防壁」と解することができる。[79] いわば「ミズガルズ」大蛇は、外縁の海洋の真ん中に放逐されてはいるが、かつては「中つ国」を支配し、その豊饒と生と死を司る存在者であったことはまさしく名前それ自体が物語っている。

「神々と人間たちのなかで最も強い」と称えられたソールは、神々の国アースガルズの守護者であったが、ラグナレクにおける巨人族・魔物に対決する神々の最終的な闘争のなかで、ミズガルズ蛇と相討ちにて倒れることが語られている。言うなれば、「内」と「外」のそれぞれの世界において、境域を守るべき両者がともに倒れることによって、同時に「中心」と「中核」の聖なる地点も宙に消散し、いっきょに世界が瓦解する。それこそがラグナレクの予言的な語りの核心をなすものであろう。Ragnarökr はその名の通り、「神々の力の滅び」を意味するが、それは「内ー中心ー外」および「上ー中間ー下」という、水平軸と垂直軸を保持しつづけていた「大いなる力」Jörmun の衰滅でもあった。

また本稿の序で提出した船葬墓についての疑問もここに氷解した。彼らの古来の世界観に照らせば、「この世」の大地の基底（Grund）と、海の底なる「あの世」の Grund とは、まさに「底なる根の領域」としてそのまま連続していると信じられていたのだ。生命と豊饒、そしておそらく至福の「根源の地」として。その証拠に、ラグナレクによって旧世界がすべて滅び去るあとに、つぎのような予言のことばが続く。「海の中から忽然と大地が現われ、かくして緑

なすうるわしき地となる。種まかずとも穀物は育つ」と（Gylf 53）。またバルドルと彼を殺した仇敵であったはずのホズルがともに蘇えり、かつて Hroptr「呪言・託宣の神」と称されたオージンが統治した地に平和に住むと（Vsp. 62）[80]。

[付記]
言語と作品の省略記号は慣例に従った。

Got：ゴート語	OE：古英語	ON：古ノルド語	OS：古サクソン語
OHG：古高地ドイツ語	Lat：ラテン語	Gr：ギリシア語	Skt: サンスクリット語
IE：印欧諸語	Gylf：「ギュルヴィの幻惑」(Gylfaginning)		Vsp：「巫女の予言」
Grm：「グリームニルの歌」			

註

1) Ole Crumlin-Pedersen, "Boat-Burials at Slusegaad and the Interpretation of the Boat-Grave Custom". in *The Ship as Symbol in Prehistoric and Medieval Scandinavia*. O. Crumlin-Pedersen & B. Munch Thye, eds. (Copenhagen: The National Museum, 1995), 87-99.
2) Michael Lapidge, et al., eds. *The Blackwell Encyclopaedia of Anglo-Saxon England*. (Blackwell, 1999), 433.
3) Robert T. Farrell, "*Beowulf* and the Northern Heroic Age". in *The Vikings*. R.T. Farrell, ed. (Phillimore, 1982), 180-216; 196.
4) Klaeber, Fr. ed. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. (1922; D.C.Heath, 1950), Notes, 122.
5) Bruce Mitchell, *An Invitation to Old English & Anglo-Saxon England*. (Blackwell Ltd, 1995), 102.
6) A.W. Brogger & H. Shetelig, *The Viking Ships*. (Dreyer, 1971), 79-103; 108-14.
7) Anthony Faulkes, ed., *Snorri Sturluson Edda: Prologue and Gylfaginning*. (Clarendon, 1982). 以下、『散文のエッダ』所収「ギュルヴィの幻惑」の引用は本著に拠る。
8) Jan de Vries, *Altnordisches Etymologisches Worterbuch*. (E.J. Brill, 1977), 263.
9) Guðni Jónsson, ed., *Eddukvæði*. I. (Íslendingasagnaútgáfan, 1976), 17. 以下、『詩のエッダ』の引用は本著に拠る。
10) de Vries, 441.
11) R. Cleasby & G. Vigfusson, eds. *An Icelandic English Dictionary*. (1874: rpt., Clarendon, 1969), 188.
12) シーグルズル・ノルダル，『巫女の予言』．菅原邦城訳（東海大学出版会、1993），235.
13) C.L. Wrenn & W.F. Bolton, eds., *Beowulf With the Finnesburg Fragment*. (1953: rpt., U. of Exeter, 1988). 以下、Beowulf の引用は本著に拠る。
14) William W. Fitzhugh & Elizabeth I. Ward, eds., *Vikings: The North Atlantic Saga*. (Smithonian Inst. P, 2000), 92; Fig. 5.13.
15) 水野知昭，「馬に乗る神々と世界樹トネリコ」『日本アイスランド学会会報』18（1999b），28-39.
16) Cleasby & Vigfusson, 285.
17) 水野（1999b），38.
18) Jan de Vries, *Altgermanische Religionsgeschichite*. Bd. II. (Walter de Gruyter, 1970), 64-65.
19) Rosemary Woolf, ed., *Cynewulf's 'Juliana.'* (U. of Exeter, 1977), 21.
20) Stephen A. Barney, Word-Hoard: An Introduction to Old English Vocabulary. (Yale UP, 1985), 55. 拙論参照：Tomoaki Mizuno, "Praise and Blame Directed at Beowulf." 『東北大学言語学論集　中村完

教授退官記念号』第4号（1995）193-200.

21) Sven B.F. Jansson, *Runes in Sweden*. trans. P. Foote. (Falth, 1987), 134.

22) Jansson, 134-5.

23) Jansson, 136.

24) de Vries (1977), 661.

25) 水野知昭，「荒ぶる軍勢を統べる神オージン」.『荒猟師伝承の東西』所収.（名古屋大学文学部，1999a），85-93.

26) Stephen Pollington, *Rudiments of Runelore*. (Anglo-Saxon Books, 1995), 46; 54.

27) 水野（1999b），28-39.

28) George P. Krapp, ed., *The Junius Manuscript*. The Anglo-Saxon Poetic Records, I. (Columbia UP, 1931), 28.

29 P. O. E. Gradon, ed., *Cynewulf's 'Elene.'* (U. of Exeter P., 1977), 74.

30) Otto Behagel, ed., *Heliand und Genesis*. (Max Niemeyer, 1965), 92-3. 以下、引用は本著に依拠。

31) 水野知昭，「Beowulfの冥界下降譚-その起源への一考察-」.『試論』（東北大学・英文学研）第17集（1977），17-32；25.

32) Jacob Grimm, *Deutsche Mythologie*. Bd. I. (1883: Ullstein, 1981), 259-61.

33) 水野知昭，「バルドル殺害神話の形成—大地母神と運命女神崇拝—」.『エポス』第6号（木魂社，1981），26-46；esp., 28-29.

34) 水野（1977），22.

35) 水野，「古ゲルマンの楽園の原風景」.『文化』第47巻，3·4号（1984），328-50. ゲルマン人にとっての「常世郷」を追究した。

36) 水野（1984），330.

37) 水野（1984），331-2.

38) Fr. Klaeber (1950), xxix.

39) 水野（1999b），34.

40) 水野知昭，「古北欧「異人による蛇神殺し」としてのバルドル神話」.『口承文藝研究』第10号（1987d），147-60.

41) 尾崎暢殃『古事記全講』（中道館，1966），118.

42) 次田真幸『日本神話の構成』（明治書院，1973），192-4.

43) 水野（1987d），147-60.

44) 水野知昭，「北欧教会建立伝説の成立背景」『人文科学論集』（信州大学人文学部）第34号（2000），89-114.

45) 水野（1999a），85.

46) 水野知昭，「八咫烏と常世浪」.『エポス』第13号（木魂社，1992），91-104；98.

47) 西郷信綱『古代人と夢』（平凡社，1972），123-75. 神田典城，「「出雲」と死者の世界—「黄泉の国」と「根の国」と—」.『現代思想』：「日本人の心の歴史」9月臨時増刊号（青土社，1982），80-91. 神野志隆光『古事記の世界観』（吉川弘文館，1986），93-118. 舟橋豊『古代日本人の自然観』（審美社，1990），184；191；159-60.

48) 荒川紘『古代日本人の宇宙観』（海鳴社，1981），50-99.

49) 水野知昭，「旅する客神ロキの神話—その(2)—」.『日本大学工学部紀要　分類B』第28巻（1987b）109-28；113.

50) Tomoaki Mizuno, "The Gefjon Story and its Magical Significance in *Gylfaginning*."『日本アイスランド学会会報』No. 13（1994），14-24.

51) 水野（1984），335-38.
52) 青木和夫他（校注）『古事記』日本思想体系（岩波書店，1982），329.
53) Sigmund Feist, ed., *Vergleichendes Wörterbuch der Gotischen Sprache.* (E.J. Brill, 1939), 222. Fr. Kluge, ed., *Etymologisches Wörterbuch der Deutschen Sprache.* (1883: rpt., Walter de Gruyter, 1975), 275.
54) W. Streitberg, ed., *Die Gotische Bibel.* (Carl Winter, 1971), 115. 以下、引用は本著に依拠。
55) Peter Ilkow, *Die Nominalkomposita der altsächsischen Bibeldichtung.* (Vandenhoeck & Ruprecht, 1968), 39.
56) Ilkow, 39.
57) Ilkow, 296-7.
58) Ilkow, 297.
59) 水野（1987b），110-15.
60) 山口昌男『文化と両義性』（岩波書店，1975），81, 83-5.
61) Kirsten Hastrup, *Culture and History in Medieval Iceland.* (Clarendon, 1985), 60.
62) Hastrup, 52-54.
63) Hastrup, 61-4.
64) Hastrup, 64.
65) 泉井久之助（訳注）『タキトゥス： ゲルマーニア』（岩波書店， 1979），30. 泉井訳を参考にしたが、原語を加え多少語句を変えた。
66) J.B. Rives, Tacitus: *Germania.* (Clarendon, 1999), 114.
67) Rives, 113.
68) Rives, 99-100.
69) Rives, 161.
70) de Vries (1970), Bd. II, 11-14.
71) Brian Branston, *The Lost Gods of England.* (Thames & Hudson, 1957), 72.
72) Kluge, 132.
73) Cleasby & Vigfusson, 144.
74) de Vries, Bd. II. (1970), 13-4.
75) Ilkow, 234.
76) J.C.G. Anderson, Tacitus: Germania. (1938; Bristol Classical P., 1997), 41. ラテン語引用は本著に依拠。
77) Rives, 114.
78) N.G.L. Hammond & H.H. Scullard, eds., The Oxford Classical Dictionary. (Clarendon, 1970), 503.
79) 水野（2000）を参照。「防壁」に関する北欧とギリシアの神話伝説に比較考察を加えた。
80) 水野知昭，「神々の犠牲者としてのバルドル―「北欧マレビト考」への序章―」，『日本大学工学部紀要　分類B』第27巻（1986），97-112. バルドルの原姿に「北欧のマレビト」の特性を認めた。